

# 魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名：日置節子 所属：大阪府立寝屋川支援学校 記録日：2022年 2月12日  
キーワード：コミュニケーションの補助(チャット機能)

## 【対象児の情報】

- ・学年 小学部2年の女兒
- ・障害名 軽度知的障がいを伴う自閉スペクトラム症
- ・障害と困難の内容  
初めての人や事柄等に不安感が強い。不安を伝えられる相手が限られている。
- ・使用した機器  
iPad iPhone watch chromebook AI スピーカー Pepper

## 【活動目的】

- ・当初のねらい  
①不安な気持ちを伝えられる相手、手段を増やそう  
②不安を軽減する手立てを教師と一緒に考え「こんな時はこうすると良い」と納得できる経験を積もう
- ・実施期間 令和3年4月～令和4年2月  
チャット機能を使った家庭と学校間のやりとりを長期休業(夏休み・冬休み)及び、毎週火曜日に実施
- ・実施者 日置節子(指導教諭)・クラス担任
- ・実施者と対象児の関係  
学部付きの教員として、不定期に対象児童の所属するクラスに入りながら、クラス担任と連携して対象児童と関わる

## 【活動・対象児の事前の状況】

- ・頑張り屋で真面目な性格の本児は、学校で、集団活動や不得手な活動に折り合いを付けながら過ごしている。しかし、家に帰ると、学校で経験した嫌な記憶を思い出して不安定になってしまう。そんな時は、母親に「今日は〇〇が嫌だった」「明日の〇〇が怖い」と言葉で気持ちを伝えていた。反面学校では、教師に不安な気持ちを伝えることが難しかった。教師は本児の不安を察することができず、不安感を解消するための対応に繋がらないことが多かった。
- ・不得手と感じる友達等と「怖い、〇〇さんがいやだ」と場を共有することへの抵抗感が強いことがある。友達の何気ない言葉や行動を、自分への不利益と受け止めることがある。  
(言葉の理解)
- ・ひらがなの短文を読んで意味を理解することができる。又、経験したことを思い出して、短文で話すことができる。

## 【活動内容と対象児の変化】

- ・活動の具体的内容  
①本児が不安を感じると予想される事柄について事前に内容を伝える。[教師から本児への手紙]  
②家庭で話した本児の不安についてやりとりをする。[本児から教師へ(母の代筆)の手紙]  
③教師と本児で文字や画像を使ったやりとりをする。[家庭と学校間でのチャット]  
④不安なことへの対応方法を教師と一緒に考え、行動する。[学校]

・対象児の事後の変化

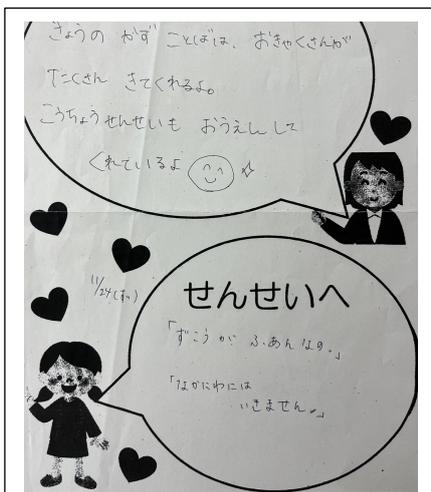
**手紙を介して教師に気持ちを伝える**

毎日々一枚の手紙を使って、対象児（以下 A さん）とのやりとりに取り組んだ。上段には教師（主にクラス担任）から A さんへ、不安を持ちそうな事柄の説明や楽しい話題を文章にして示した。A さんは登校後に手紙を読んだ。下段には、下校後、A さんが家で話した思いを言葉通りに母が代筆してくれ、次の日に学校に持参した。手紙を介して教師は、A さんの気持ちを受け止め、A さんとゆっくり話をする時間を設けた。毎日のやりとりを繰り返すうちに、A さんは、手紙に書かれた内容を教師に言葉で伝えられるようになっていった。〔図1・2〕

冬休みの終わり、A さんは3学期が始まることへの不安を、自分自身の言葉と文字で「手紙」にして学校に持ってきた。A さんは手紙を介しながら、自分で自分の気持ちを言葉にして表現し、教師に伝えることができた。〔図3〕



〔図1〕A さんの思い  
「体育の時、5年生がいて嫌だった。  
2年生だけがいいよ！」（4月）



〔図2〕A さんの思い  
「図工が不安。中庭には行きません。」  
（11月）



〔図3〕 iPad を友達に見られるのが嫌だ  
学校が不安  
（冬休みの終わり）

**チャットを使ってやりとりをする（夏休み・冬休み・週に1回の iPad 持ち帰り日）**

最初は友達と遊びながらチャットを体験し〔図4〕、夏休みを契機に家庭と学校とのチャットでのやりとりを開始した。夏休みのチャットでは、A さんとルール作りをした。保護者の協力が不可欠だったこともあり、関わる人それぞれに無理のないペースで、また A さんのやりたい気持ちを大切にしながら取り組めるように配慮した。〔図5〕



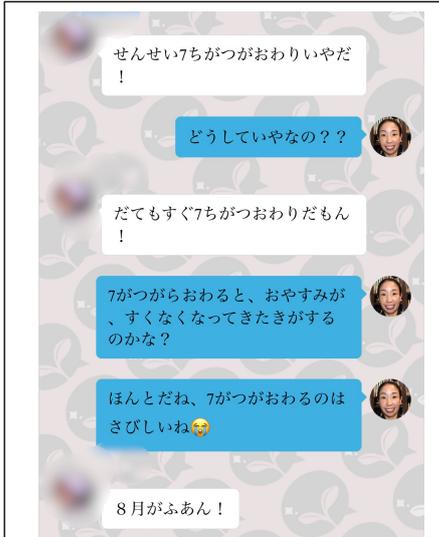
〔図4〕友達とチャット体験

- ＜A さんとの確認内容＞
- チャットをする日時
  - 返事がすぐにできなくても OK
  - 内容は何でも OK
    - ・夏休みのできごと、気持ちなど
  - 参加する先生（3名）
- 〔図5〕チャットのルール

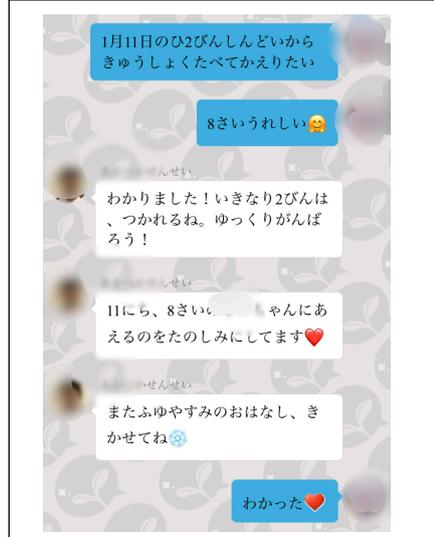
始めは、入力自体を楽しんで文章表現になっていなかったが、教師からの問いかけに答えるようにしながら、少しずつ単語、短文でのやりとりができるようになった。やりとりを楽しむうちに、7 月の終わりに初めて不安な気持ちを文章で送ってきた。「8 月は不安」という内容だったが、その不安に対して、不安を受け止め、関わる教師が連携しながら「大丈夫」「8 月も楽しいよ」といった文章を返信するうちに、A さんの言葉が「8 月すき」に変化した。〔図6〕

冬休みにも同様に、自分の思いを文章にしてやりとりができた。夏休み、冬休みと長期休業の終わりは、新学期に対

する不安を抱えやすい A さんだったが、チャットを使ったやりとりが、不安や思いを教師に伝える経験や手段の一つとなった。[図7]



[図6] A さんの思い  
「もうすぐ7月が終わる、8月がくるのが不安」 (7月)



[図7] A さんの思い  
「早めに帰りたい(早めに帰るとがんばれる)」 (3学期始め)



DropStep+ByTalk

(使いやすさのポイント)

- ・簡易な表記
- ・クローズな環境
- ・画像、絵文字の活用

### 不安なことに対してどうするかを教師と一緒に考えて行動する

<やりとりを通して分かった A さんの不安要素>

知らない事柄	新しい授業内容 健康診断 大きな行事 など
知らない人	新しい先生 関わりの少ない他学年・他クラスの友達・上級生 など
マイナスイメージを持った事柄	負けたことがあるゲーム 不得手な給食献立 友達の行動 など

これらの不安には、①事前に内容や予定を伝える②相談しながらどうするか決めるという対応をした。例えば、「上級生がいて嫌だった」という思いに対しては、上級生が大勢いるというシチュエーションによるものと推察されたので、A さんに上級生の教室に遊びに行くことを提案した。上級生との個人的な関わりが増えることによって A さんの不安は解消していった。「負けを体験したゲーム」への不安に対しては、A さんに見ていても良いという選択を伝えた。併せて、勝ち負けのない状況でゲームができる場面を作ることで、A さんは少しずつ参加場を広げていった。

対応を繰り返すうちに、「A さんの不安のほとんどは本人の納得やポジティブな体験の中で解消していける」ということが分かった。まず初めに、A さんが「気持ち」を伝えられる相手を増やすことが大切だと改めて捉え直すことができた。

#### 【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

#### ◎不安のやりとりを支えた「文字」を介したコミュニケーション

家庭で話される A さんの思いを、教師が A さんから直接聞き取ることができたのは、家庭と学校間で、文字(手紙・チャット)を媒体としたやりとりができたからと考えられる。A さんにとって「不安を文字にして表す」ことで、思いを教師に伝えることができるという安心感に繋がったのではないだろうか。また教師も、A さんとの手紙やチャットがあることで、A さんの思いを知り、受け止め、一緒に考えて行動する機会を持つことに繋がった。

## ●AさんとのコミュニケーションにおけるICTの役割

長期休業中は家庭と学校の繋がりが途切れやすい。その間も、チャットを介して、その時々を思いやりとりすることができた。また、休み中の楽しい出来事についても、画像や文字を使ってやりとりができた。

長期休業の終わり頃に、学校が始まることへの不安が強くなることが多い A さんだったが、教師とのやりとりを通して不安を軽減することができた。チャットを活用することで、学校と家庭が繋がっていることを実感しながら休業期間を過ごすことができた。

・エビデンス

Aさんの2月現在のエピソードより

### ●教師に自分の気持ちや不安を伝えられる場面の増加

- ・不安なことがあっても、「〇〇先生にお話してみる」と言って、学校に登校してくる日が増えた。
- ・教師と事前に確かめ合うことで、「この時間のこのゲームは見学します」などの自分ができる方法を、関わりの少ない教師にも自分で伝えられるようになってきた。

### ●いろいろな友達や教師との関わりの広がり

- ・自分から他クラスの友達を訪ねて遊びに行ったり、馴染みの少なかった教師と会話をしたりできる場面が増えた。
- ・不安を表現するために口にしていた友達に対する「嫌い!」「あっち行って!」などの強い口調の言葉が減ってきた。
- ・いつもの関わりに加え、クラスの様子が写った画像を、友達と見返しながら楽しむ様子が見られるようになった。

・今後の見通し

思いが伝わった、一緒に解決できたという経験を大切に

Aさんが自ら不安の解決のために行動できるようになるには、もう少し時間が必要だと思われる。今後も、保護者と連携しながら、Aさんの思いが周囲に伝わり、安心できた経験を積み重ねることが大切だと考えている。

・その他のエピソード

Aさんは自分の楽しい記録を収めるツールとして、文字に親しむツールとして、余暇を楽しむツールとして、iPadを自分の力で活用することができた。最近、自分専用のiPadを購入したと保護者から聞いている。今後も保護者のご理解の元、iPadを楽しく活用していってくれると思われる。[図8・9・10]

